

ワールドエリアはものすごく危険。

大人たちの言葉は脅しではなく事実だったので、ダンデとソニアは命を守るための知識と技術を可能な限り詰め込んで、ジムチャレンジに参加したものだ。それでも自然やポケモンの厳しさに圧倒されたのは、一度や二度ではない。ダンデとソニアが力を合わせて乗り越えたピンチは、家族には決して報告できない二人だけの秘密である。

だが、人間の悪意への対策は、十分ではなかったのかもしれない。大きなカメラと無遠慮に突きつけられるマイクを思い出しながら、ダンデはモンスターボールを握りしめた。笑みを貼り付けて近づいてくるメディアの人間とは違い、慌ただしく走り回る男たちの顔は、怒りと敵意に満ちている。

「絶対にあのガキを見つけ出せ！」

ダンデはただ、道を尋ねただけだ。ナックルシティの旧市街は入り組んでおり、道に迷ったのは、やむを得ない。だが、入り込んだ建物の住人らしい中年の男が、廊下でダンデを見るなり大声を上げて掴みかかってくるなど、想像もしていなかった。

「悪いな、リザードン」

相棒の背に乗れば、ダンデは簡単にナックルシティの大通りに出ることができただろう。ラテラルタウンとアラベスクタウンのジムバトルを終えたりザードンを休ま

せたことが間違っていたとは思わないが、もし事態が悪い方向に転がれば、ポケモンたちもボールの中で休憩を取るどころではない。危害を加えようとする相手から逃げられなければ、戦うしかないだろう。

だが、人の顔を見るなり襲いかかってくるような大人が、ポケモン同士の勝負に応じるだろうか。心の中で、ダンデは首を横に振る。ルールの異なる世界で生きる相手を理解する努力は大切だが、優先するべきは自分たちの身の安全だ。

「おい、どこだ、出てこい！」

男の怒鳴り声と、ドアが乱暴に開け放たれる音が廊下に響く。古い建物を一部屋ずつ調べるつもりようだ。

モンスターボールを右手で握りなおし、ダンデは改めて薄暗い部屋を見回した。逃げ込んだ際にドアに鍵を掛けたから、少しは時間が稼げるはずだ。雨戸を下ろした窓を塞ぐように、背の高いキャビネットが置かれている。埃っぽい空気が、喉に不快感を広げていく。住人はおろか、管理する者もない空き部屋なのだろう。

「ドラメシヤ」

音もなくボールから出てきたのは、少年の手持ちに加わって間もないポケモンだった。まだ体は小さく、力も弱いが、持ち前のスピードとドラゴンタイプ特有の伸び代を、ダンデは高く評価している。

「ソニアとワンパチを探してくれ。きっと近くにいます」

ずだ」

大きな目がわずかに動く。少し考えてから、ダンデは筆記具を取り出した。床に紙を置いて、短くメッセージを書き記す。

「これをソニアに渡すんだ。頼んだぜ」

ドラメシヤはメモをくわえて大きく頷き、暖炉に潜り込んだ。彼がすりぬけの特性を持っていれば、煙突を通らずに外に出られたかもしれないが、それはダンデが考えても仕方がないことだ。

大ピンチだ。警察を呼んでくれ。それがダンデの伝言だった。ごく当たり前に、彼らは大人を信じている。話を通じそうにない乱暴な相手でも、親切で頼もしいお巡りさんならば、きつとうまく取りなしてくれるはずだ。

「こんにちは、どなたかいらいっしゃいますか？」

建物に呼び鈴の音が響く。ソニアの訪問は、ダンデの予想よりも遥かに早かった。入口に複数の足音が近づく。

「すいません、この近くで男の子を見ませんでしたか？」

「あのガキ、仲間を呼びやがった！」

ソニアの短い悲鳴とワンパチの低い鳴き声。ダンデは迷うことなく、音を立てて扉を開けた。二人の男が振り返る。

「ソニア、警察は？」

「警察？」

「警察だ！」

ダンデの問いに、ソニアの安堵の表情が、疑問に塗り

替えられる。足下に控えていたワンパチが小首を傾げた。鼻の鋭いこいぬポケモンは、ドラパルトと合流するよりも早く、ダンデの居所を見つけ出してしまったようだ。

「このまま帰れるなら、呼ぶ必要はないだろう。勝手に家に入っちゃって、すいませんでした」

「すいませんでした」

大声で謝罪の意を示したダンデに、ソニアが続く。野生のポケモンがテリトリーに入ったものを攻撃するのは、巢や家族を守るためだ。そのため、立ち去ったものを追いかけて攻撃することは少ない。ワイルドエリアで学んだポケモンの生態は、だが当然ながら街の人間には当てはまらなかった。

「ふざけるなよ、ガキども」

「このまま帰れると思うな」

黒髪の男の大きな手が、ソニアに伸びる。ダンデの視界が闇に染まり、目の奥から駆け巡った熱が、全身を突き動かした。

「ソニアに触るな！」

叫びながら突進して、ダンデはソニアと男を引き離すという目的を果たしたが、リザードン級の大成功というわけにはいかなかった。勢いのつき過ぎた体が、バランスを崩す。ソニアがダンデを受け止めようとしたが、背丈が自分と同じぐらいの男児を支える力は、彼女にはな

かった。悲鳴と共に、二人は玄関に倒れ伏す。

「ダンデくん、大丈夫？」

不安げな声に合わせて、オレンジ色の髪が揺れた。恐怖が滲む緑の瞳に怖い顔の男たちが映らないように、ダンデはソニアに背を向けて両手を広げる。

「レディを守るのか。立派だなあ」

子どもたちを見下ろす男の笑みには、吐き捨てられたガムのような粘り気があった。右足が肩に置かれ、ダンデは顔をしかめる。

「乱暴はやめてください！ 本当に警察を呼びますよ！」

「おお、怖いねえ」

わざとらしく肩をすくめながら、灰色の髪の男が玄関ドアの前に立った。

「散々、俺たちの仕事の邪魔をしてくれたんだ。たっぶり礼はしないとな」

「仕事の邪魔？」

「そんなことした覚えはないぞ！」

子どもたちの抗議を聞き流しながら、男がドアノブに手を掛ける。その足にしがみついたソニアを踏みつけようとして、彼は悲鳴とともに床に転がった。ダンデの肩を押さえつけていた男が、慌てて仲間に駆け寄る。

「ドラメシヤ！」

どこことなく誇らしげな表情で宙に漂うポケモンに、ダンデは心からの感謝を示した。ソニアたちを見つけれ

なかったドラメシヤは、全速力でダンデのもとに戻ろうとして、閉ざされかけたドアの隙間から男の鼻に突っ込んだのだ。

「本当に身に覚えはないけれど、オレたちを傷つけるつもりなら、ここで戦うぜ」

立ち上がりながら、ダンデは落ち着いた口調で告げた。服の埃を払いながら、隣にソニアが立つ。背後の扉を開けて逃げおおせたとしても、男たちは執念深く二人を追いかけてくるだろう。自分だけではなく、ソニアに暴力を振るうような相手だ。話し合いによる平和的な解決は、決してできない。ドラメシヤと入れ替わる形でボールから出たリザードンの目には、闘志の輝きが宿っていた。

「このガキども！」

腕力と体格にまかせて子どもを痛めつけるという目論見をポケモンに阻まれ、男たちは怒りの声を漏らした。黒髪の男のボールから、グソクムシヤが飛び出してくる。

「ダンデくん、気をつけて！」

灰色の髪の男が出したフォクスライに、ワンパチが威嚇の声を上げる。ダンデは黒髪の男とグソクムシヤに意識を集中させた。

「リザードン、エラスラッシュ！」

「れんぞくぎりだ、グソクムシヤ！」

エラスラッシュの勢いに押されて、グソクムシヤはリザードンに踏みこめない。三対の腕の精密機械のような

動きに、ダンデは見覚えがあった。

「オマエ、巨人の鏡池で戦ったグソクムシャか……？」

戦いの場に沈黙が満ちた。グソクムシャの目の奥に、驚きが浮かんのように見える。ポケモンの個体に差があるのは当然だが、外見以上にダンデの印象に残っていたのは、その行動だった。

「思い出した。雨の日に、池に岩を落とそうとしてた！」

ソニアの声が、男たちの表情を赤く染める。不審な動きをしていたグソクムシャを止めようとして、そのまま戦ったことを、彼女も覚えていたようだ。

「あの時のトレーナー……？」

ワイルドエリアで戦ったグソクムシャのトレーナーは大人の男で、顔を隠していた。世の中には、顔を隠して働く人がいることをダンデとソニアは知っているが、二度も襲いかかってきたことを考えれば、黒髪の男は人に言えない仕事に就いているように思われた。

「警察って言ったときの反応もおかしかった。あなたたちは一体、何をしていたんですか？」

「だから、仕事だよ」

「ワイルドエリアの自然を壊したり、道に迷った子どもを痛めつけようとするのが？」

ソニアの質問に、男たちは苛立ちを募らせる。だがグソクムシャは、落ち着いた動きでリザードンとの間合いを詰め、フォクスライはワンパチとにらみ合いながら、

子どもたちの隙をうかがうように、周囲に目を配っていた。

「お前たちみたいなガキどもには、分からんだろうがな」

「ワイルドエリアで暴れたことと、わたしたちを傷つける意思があることは否定しないんですね」

男たちの歪んだ表情が固まった。ジ・アイスと呼ばれるこおりジムのジムリーダーを、ソニアは手本にしたのかもしれない。彼女がポケットから取り出したのは、通話状態の携帯電話だった。

「あなたたちの話を詳しく聞きたがってる人がいますよ。逆探知で、この住所も分かっているんじゃないですか」

「このガキ、いつの間に……」

ソニアは携帯電話を肌身離さず持ち歩いている。おそらく立ち上がる際に、見えないように通話ボタンを操作していたのだろう。グソクムシャのトレーナーは顔を赤く染めたが、フォクスライのトレーナーの顔は青かった。

「ダンデくん、あの人たちを捕まえるわよ」

「オーケー、任せろ！」

その瞬間、追う側と追われる側が逆転した。二度目のエアスラッシュが、グソクムシャの重い体を吹き飛ばす。

「おい逃げるな、グソクムシャ！」

グソクムシャはききかいひという特性を持ち、体力が低下すると戦いから逃れようとする。トレーナーの指示ではなく、生き延びるという本能に従ったポケモンに代

わって、シザリガーが現れる。リザードンがダンデの判断を求めるように振り返った。

「ここは、任せた！」

張り上げた声に、リザードンが二度、首を振る。大きく揺れるワンパチの尻尾を見届けて、ダンデは小さく頷いた。

「リザードン、だいもんじだ！」

「スパークよ、ワンパチ」

二人の声が重なり、リザードンが大きく息を吸う。吐き出された炎はワンパチの頭上を通り抜け、フォクスライを包みこんだ。

「なっ——」

黒髪の男の足下に、シザリガーが転がった。ワンパチのスパークを受けた体は、しばらくは動けないだろう。

「うまくいったな、ソニア！」

「やったね！」

視線を合わせて二人は笑みを交わした。タッグバトルはおろか、ポケモンでの戦いに慣れていないトレーナーが相手だったが、ターゲットを入れ替えて意表を突く作戦は成功したようだ。

「あっ、火事です！」

だいもんじの炎とスパークの電気が火災を引き起こしたわけではない。ハロンタウンやブラッシータウンの子どもは、ウールーの毛が燃えにくいことをよく知ってい

る。古びたカーペットはウールーの毛を使っているらしく、だいもんじの炎を吸い込むように消し去った。だが表面は黒ずんでおり、焦げと汚れの区別は難しいように見える。

「大変だ、みんな逃げろ！」

ソニアに調子を合わせて、ダンデも声を張り上げる。

ワンパチが高らかに吠え、リザードンが先端の炎を見せつけるように大きく尻尾を振る。上の階に人間がいるならば、音や臭いが届いているはずだ。

「畏だ、来るな」

「馬鹿が！」

グソクムシャのトレーナーが、フォクスライのトレーナーを怒鳴りつける。男は自ら、建物に仲間が潜んでいることを、ダンデたちに教えてしまったのだ。

「おいお前ら、撤収しろ！ 警察が来る」

「逃がさないぞ！」

「警察が来るから逃げるなんて、やましいことがある証拠だよ」

ダンデとソニアを睨み付ける男の目に、強い憎しみが宿っていた。外に出るためならば、迷うことなく二人に手を上げていただろう。だが、リザードンとワンパチがそれを許すはずもない。ポケモン同士の戦いに持ち込んだ時点で、子どもたちに敗北はなかったのだ。

「何だってジムチャレンジャーがこんなところ？」

階段を下りてきた男の一人が疑問の声を上げる。警察から逃げようとするような者にも、ジムチャレンジャーの顔は広く知られているようだ。

基本的に、ジムチャレンジは個人戦だ。だが、もしジムチャレンジャーが二人一組となってタッグバトルを行うならば、トーナメントでもバトルロイヤルでも、最後まで勝ち残るのは自分とソニアだとダンデは考えている。「まだ戦えるよな、リザードン?」

「ワンパチも、あと少しだけ頑張って!」

それが子どもの思い上がりではないことを、リザードンとワンパチが証明した。繰り出された五体のポケモンは、数の優位を活かしきれず、互いの足を引っ張り、攻撃を受けて一体ずつ戦闘不能に陥っていく。吹き飛ばされたヨワマルの足の位置は分らないが。

「パトカーの音だ。そろそろ警察が来るわよ、ダンデくん」

ソニアの報告は、ダンデではなく男たちに向けられたものだ。同じ方向を見ているのに、自分と彼女の目に映るものは、まるで違う。だからこそ二人は助け合い、ジムチャレンジという危険な旅を続けられるのだ。

もしも彼女が、自分の隣ではなく、正面に立ったならば。進む道の先に示される可能性に、ダンデはひと匙の空想を付け加える。もしもジムチャレンジが、二対二のタッグ形式で、ソニアが自分以外の誰かとコンビを組む

ならば。

ジムチャレンジで知り合ったルリナは、みずポケモンの使い手だ。仲の良いソニアならば、バランスの取れたチームを作ることができるだろう。

迎え撃つ自分は、誰とコンビを組むか。ドラゴン使いのキバナと組めば、攻撃のバリエーションが増えそうだが、ルリナと組んで互いの弱点をカバーするのも面白いだろう。面白そうなジムチャレンジャーは、まだ何人か勝ち残っているが、ジムリーダー同士のタッグマッチも見たいし、できることならば戦いたい。ポケモン勝負には、カレーの種類よりもずっと多くの可能性が秘められているのだった。

「なんだ、もうおしまいかな?」

ダンデに空想の余裕があったという事実が、男たちの力量を示していた。彼らにとってポケモンは悪事を働くための道具であって、心を通わせ、鍛え上げる相棒ではなかったのだろう。戦う力と意欲を失った人間とポケモンに、リザードンとワンパチが睨みを利かせていた。

「こんにちは、警察です」

「通報したのはどなたですか?」

二人組の警察官が、戦いの終わりを告げた。ダンデたちに襲いかかったのは、事故屋と呼ばれる保険金詐欺グループのメンバーで、ワイルドエリアで事故や災害を起こし、保険金を騙し取っていたらしい。多くの詐欺事件

に関わっているらしく、全員、警察で取り調べを受けるようだ。

「ミスター・ダンデを襲ったのは、ワイルドエリアで一度会っていたからだろうね。自分たちのやっていることに気づいて、捕まえに来た。そう考えたのかもしれない」
 「詳しいことは、これから本人から聞き出します。二人とも、ご協力ありがとうございます」

だが、事情聴取が終わっても、ダンデとソニアは取調室の椅子から立たせてもらえなかった。勝利を収めたものの、犯罪者の一味を相手に戦ったことが、警察官として見過ごせなかったらしい。

「ジムチャレンジには危険が付き物。だからこそ、身を守るということについて、よく考えましようね」

「刑事さんの言う通りです。有力なジムチャレンジャーが、犯罪に巻き込まれて棄権するなんて、あつてはならないことですよ」

取調室のドアを開けた男の前に、二人は表情を引き締めた。家族の代わりに保護者として指名した人物が、分刻みのスケジュールに穴を開けてナックルシティの警察署に駆けつけるとは思わなかったのだ。

「ローズさん、それにオリーヴさんも。来てくれてありがとうございます」

「二人とも、無事で何よりです」

ローズ委員長は柔らかに微笑んだが、後ろに控える秘

書のオリーヴは不機嫌そうに見えた。彼女の顔は、ダンデよりも高い位置にあるから、余計に表情が分かりづらいのかもしれない。

「そしてお手柄です。よく保険金詐欺グループの拠点を突き止めてくれましたね」

笑みを保ったまま、ローズは口の前に人差し指を立てた。

「後のことはわたくしたち大人に任せて、きみたちはジムチャレンジを続けなさい。もちろん、今日のことはご家族には秘密にしておきますよ」

「ありがとうございます！」

深く頭を下げて、ダンデとソニアは感謝を示した。家族に心配をかけたたくない二人の思いを、ローズ委員長は受け止めてくれたのだ。

「遅い時間まで、よく頑張りましたね。もうホテルでお休みなさい」

「パトカーでお送ります。我々も、あなたたちがナックルジムに挑戦するのを楽しみにしていますよ」

警察官の運転するパトカーで、ダンデとソニアはポケモンリーグと提携しているホテルに送り届けられた。空は暗く、ロビーに宿泊客の姿は見当たらない。

「ああ、疲れた……」

「本当に大変だったね……」

客室に向かうエレベーターで、二人は短く言葉を絞り

出した。全身はもちろん、頭も疲れていることを実感する。黙りこんだ二人を、エレベーターは客室フロアまで運んだ。

「ダンデくん、助けてくれてありがとう」

部屋の前で足を止め、ソニアが言った。事故屋の一味から彼女を守ったことを思い出し、ダンデは肩をすくめる。

「札を言うのはオレのほうだ。ソニアとワンパチが助けに来てくれなかったら、オレは今、ここにはいられなかったぜ」

「じゃあ、お互い様だね」

「だよな！」

ソニアがようやく笑顔を取り戻したので、ダンデも歯を見せて笑った。

「……警察の人は、安全のためには戦うだけじゃなくて、逃げたり隠れたりすることも大事だから、よく考えろって言ってたけどさ」

シングルベッドに寝転がり、ダンデはモンスターボールの相棒に語りかけた。シャワーを浴び、寝間着に着替えた体に、少しずつ眠気が近づいてくる。

「誰かのピンチのときに、考える暇なんてないよな」

ソニアの怯えた表情が、そして故郷の弟の泣き顔が少年の頭に浮かぶ。大切な人と自分自身を守るには、冷静な判断が必要なことは理解できるが、突然訪れる危機は、

人から平常心を奪うものだ。

ならば、強くなればいい。あらゆる脅威や悪意に立ち向かえるように、心と体を鍛え上げるのだ。

「だから、オレと一緒に頑張ろうな、リザードン……」

眩きながら、ダンデは眠りの沼に引きずりこまれていく。闇のなかで、わずかにモンスターボールが動く気配があった。

「……というわけだ。オレたちがジムチャレンジを続けられたのは、今にして思えば、ローズ委員長が手を回してくれていたからだろうな」

「保険金詐欺グループが逮捕されたのに、新聞の扱いも小さかったものね」

頷き合うダンデとソニアから視線を外して、ユウリはホップと顔を見合わせた。植物と本に囲まれた研究所は、尊敬する人たちの昔話に耳を傾けるのにうつつけの場所だ。だが、子どもが悪の組織を壊滅させるという筋書きは、あまりにも現実離れしている。

「あのさ……」

何事かを言いかけたホップを、ダンデは険しい顔と右手の動きで制した。

「今の話、母さんたちには内緒にしておいてくれ」

ダンデの隣で、ソニアが重々しく首を振る。家族に心配をかけたくない気持ちはユウリにも覚えがあるが、犯罪組織に関わった経験はない。家族に黙っていることが正解なのか、判断に迷うところだ。

「でも母ちゃんたち、たぶん気づいていると思うぞ……」

「そうなのか？」

ダンデとソニアが、揃って渋い木の実を食べたような表情を浮かべた。ホップの母親やマグノリア博士を相手に、隠し事など無理ではないか。そこまで考えたユウリの頭に、母親の笑顔が浮かんで消えた。良いことも悪い

ことも、親の勘で見抜かれそうな気がする。

「そのあたりは後で話し合うとして……」

咳払いとともに、ダンデはやや強引に話題を変えた。

「二人に知っておいてもらいたいのは、ワイルドエリアを利用して保険金詐欺を働く人間が、今も昔もいるということだ。そのグループを、警察は事故屋と呼んでいた」

「保険金って、保険を掛けている人が病氣や怪我をしたり、亡くなった時に支払われるものでしょう？」

「物が壊れたときに、保険が下りることもあるぞ。例えば、ワイルドエリアの嵐でテントが壊れた場合なんかは」

「じゃあ、ラテラルタウンの壁画も……」

「あれは故意、つまりビートに壁画を壊すという意思があったから、保険の対象にはならないんだ」

「じゃあビートは、一人で壁画を弁償しないといけないんですか？ 大変そう」

ジムリーダーの給料は分からないが、壁画の修理代を支払うためにも、ビートのフェアリージムはメジャークラスで戦い続ける必要があるのだろう。もつとも、ライバルの懷事情は、勝負に手心を加える理由にはならないのだが。

「いいや、ローズ委員長が、全額弁償を引き受けた。壁画を壊したのは、自分のダイオウドウだからと」

「芸術的な壁画は、町おこしのためのレプリカだったから。もしも本物を壊していたら、ローズ委員長は一文無

しになっていたかもしれないわね」

ユウリはホップと顔を見合わせた。値段をつけることができない壁画の価値に驚けばいいのか、ビートに厳しい処分を下す一方で、彼の未来を守ろうとしたローズ委員長の行動に思いを馳せればいいのか、迷うところだ。

「保険金の支払いって、色々大変なんですね。それなのに、お金を騙し取るなんてことができるんですか？」

「そんなことができないように、保険会社は綿密な調査をしている。だが、悪い奴らは調査の目を掻い潜って、不正に大金を得ているんだ」

苦い表情でダンデは息を吐いた。

「ネットの世界には、スマホロトムに頼んでも決して使えないような闇サイトやアプリがあるの。悪い人たちは、そういった場所でも連絡を取って、犯罪の計画を練る。ワイルドエリアで事故や災害を起こして、依頼人がわざと巻き込まれて怪我をする。そうして受け取った保険金を山分けするんだって」

SNSには、安全な場所から他人を傷つけようとする悪意が存在するが、闇サイトに蠢いているのは、他人を傷つけ、騙しても大金を得ようとする欲望だ。それを形にするために、犯罪組織はポケモンの生息地であるワイルドエリアを利用している。

「お金のために、わざと災害や事故を起こす人がいるなんて、考えもしなかったよ」

「その巻き添えで、人やポケモンが怪我をするんだ。悪い奴らをやっつけたアニキとソニアは、無茶はしたけど間違っていないと思うぞ」

ホップの言葉に、ユウリは頷いた。風に転がった小石が落石を招きかねないのが、ワイルドエリアである。そのような場所で、事故や災害をわざと起こせば、被害は保険金が欲しい人間だけには留まらない。罪のないポケモンを傷つける行為は、若いチャンピオンにとって決して許せるものではなかった。

「そんな悪い人たちが、今もいるってことは、捕まえに行けばいいんですよね」

「話が早くて助かるな」

苦笑するダンデの目には、ユウリと同じ光が宿っている。おそらく本心では、幼い日のように悪の組織と戦いたいのだろう。

「だが、事故屋の拠点は、現在、警察が捜している最中だ。その時が来るまで、キミたちにはポケモンリーグの調査に協力してもらう。頼んだぜ」

ユウリはホップと顔を見合わせた。ブラックナイトの日の、マントを羽織ったダンデの姿が頭に蘇る。現在の彼にとって、二人は守るべき子どもではなく、仕事を任せられる相手なのだ。

「はい、任せてください！」

「オレとユウリが力を合わせれば、百人力だぞ！」

大きく胸を張りかけて、ホップは動きを止めた。迷いを含んだ視線が、師匠の顔の上で揺れる。

「悪い奴らを放っておいたら、たくさんのポケモンが傷つくんだ。だからオレは、ポケモンリーグの調査に協力したい。勉強の遅れは、後でちゃんと取り戻すからさ」ホップが目指す道の険しさが、言葉と表情の隙間からユウリにも想像できる。だが、ライバルとして助け合い、高め合うことはできても、勉強の手伝いは彼女には難しかった。

「そう言ったからには、いいレポートを書いてもらおうからね。特別に、ダンデちゃんとユウリに手伝ってもらってもいいわよ」

突然の指名に、ユウリはダンデと顔を見合わせた。ソニアが瞳に悪戯っぽい光を宿して微笑む。

「まあ、手伝いを頼んだのはオレだから……」

「気分転換のバトルと、夜食のカレー作りなら任せて」

「カレーなら、レポートもはかどりそうだ。ユウリのこと、頼りにしてるぞ」

カレーに反応したのは、ホップだけではなかった。お腹を空かせたワンパチを連想させる顔で、ダンデがソニアを見つめている。

「サンドイッチを作ったから、持って行って。カレー味じゃないけど」

「サンキュー！」

歯を見せて笑うダンデを、ユウリは強く責めることができない。チャンピオンの忙しさというものを、今の彼女は身をもって知っている。人のつながりをたやすく断ち切ってしまう時間と距離に対抗するには、多少強引な手を使ってでも、オフと用事を作るしかないのだ。難しい課題を次々と持ち込んで、ソニアの関心を引き続けたのは、当時のダンデにできる精一杯の努力だったのかもしれない。アポを取らずに訪問するのは、社会人として良くないが。

「相変わらず、アニキは忙しいんだな」

「普段の仕事もあるもんね。バトルタワーだって、通常営業なんでしょう？」

「ああ。ポケモンリーグが事件解決に動いていることを、犯人たちに知られたくないからな」

保険金詐欺グループを壊滅させるためにも、警察やポケモンリーグはまだ事件の存在に気づいていないことにしておきたいのだろう。先日ワイルドエリアで発生した地震が、ポケモンの力で引き起こされたことを知っているのも、ごく一握りの関係者だけだ。そこに名を連ねているという事実が、ユウリとホップが大人として認められ、責任を求められていることの表れなのだろう。

「犯人たちに気づかれちゃいけないんだったら、目立たないようにパトロールしないとな」

「あなたたちなら、調査やトレーニングでワイルドエリ

アに出入りするの、いつものことでしょう」

「でも、ワイルドエリアで悪いことをしている人たちがいるって考えたら、普段通りって難しいよね」

考え込むユウリとホップに、ダンデがリーグ委員長の顔を向けた。

「しばらくの間、キミたちには、ソニア博士の護衛を頼む。今回の事件に詳しいポケモン博士だ。十年前のことで恨みを買っている可能性もあるから、気をつけてくれ」

「ダンデくんってば、変なところで心配性ね。もちろん、二人には手伝ってもらおうよ」

ソニアは肩をすくめたが、ポディカードを付けるという提案を拒否する意思はないようだった。

「ポケモンリーグも警察も、キミの知識を頼りにしているんだ。必要なものがあれば、何でも言ってくれ」

「そう言われると、何だか照れるわね」

「博士が事件の解決に協力するなんて、ドラマみたい！」
弾んだ声とともに、ユウリは眼を輝かせた。ドラマのような犯罪が実際に起きているのは痛ましく、怖くもあるが、探偵のような観察力と推理力を持った人物が力になってくれているのだから、事件の解決には時間はかからない気がする。

「捜査に協力するって言っても、ソニアは何をする気なんだ？」

「もう一度、崖崩れの現場に行こうと思うの。行方不明

になったカイダラさんの手がかりが残っている可能性があるし、現場を見ていないユウリだったら、わたしたちが見落としていたことに気づくかもしれない」

「頑張ります！」

ソニアの言葉に、ユウリは心持ち背筋を伸ばす。最悪の結果が待ち受けているとしても、ポケモン博士とライバルが一緒ならば、恐れるものはないような気がした。